

エアミス
Airmys

非実在 探偵小説研究会

21



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会21号 目次

企画

企画1 お題競作 「変格ミステリ」

リサと悪霊

天涯に至る螺旋

沈没した世界の静止点

喋る案山子と女子高生

異世界に雪ふりつむ

一八七二、聖リユーク療養所

企画2 二〇二〇年度エアミス研ミステリランキング

麻里邑主人

紫藤はるか

佐倉丸春

神崎蒼夜

三田村恵梨子

根倉野蜜柑

その他

【和翠の図書館】第二回 戯曲

松井和翠

ライトノベル本格ミステリ補完計画

延長戦

麻里邑主人

表紙・扉ページ

ウスタアヤ

210

168

160

94

82

60

47

25

6



企画1 お題競作 「変格ミステリ」

今回のお題競作企画は、テーマ「変格ミステリ」です。

「本格」とは一味違う、「変格」の世界。では具体的に、変格とはどんなモノかという事について、執筆陣には、謎解き以外の部分（幻想味や怪奇など）が過剰に表現されたミステリ、という定義をして競作にチャレンジしてもらいました。

このテーマ競作に集まったのは6作品。各自の持ち味を活かした「変格」が揃いました。

それではどうぞお楽しみ下さい。

リサと悪霊

麻里邑圭人

1

秋の気配がすっかり迎りに漂うようになった、一九九六年十月中旬のことだった。

耳を澄ますまでもなく、絶えず虫の声が聞こえてくる。それはさながら人間という人間が全て死に絶えてしまつたかのように……と、ついそんなことを考えてしまうのは、ここが町外れのせいかな喧騒の類いが全くと言つていいほど聞こえてこないせいもあるだろう。加えて今は午前二時——いわゆる草木も眠る丑三つ時。恐らく今ここで活動している人間は私とリサくらいしかいないはずだ。そして、そんな時間に私たちが活動しているのには深い理由があった。

私は目の前に聳え立つ、鬱蒼とした木々に囲まれた直方体の建造物を仰ぎ見た。これが昼間だったら、ただの廃墟と化したビルにしか見えなかったことだろう。しかし、今は違う。夜の闇は目に映るもの全てを得体の知れない禍々しい存在へと変貌させる。事実、今私の目に映るそれは、巨大な墓標にしか見えなかった。まるで、ここが死者たちの住処であることを主張しているかのよう——。

「……いや、主張しているかの『ように』ではない。実際、主張しているのだ。なぜなら——」
「なぜなら現在ここは死霊の住処と化してしまつているのだから——といったところかな」

不意に隣のリサがそんなことを言い出したので、私はビックリして思わず手にしていた懐中電灯の明かりを彼女の顔へ向け、まじまじと見てしまった。といつても彼女の顔のほとんどは黒いフードに覆われていて、よく分からなかったのだけだ。

「フフフ、ナナミは気付いてないかもしれないけど、思っていることがそのまま声に出ていたよ」

そう言って僅かに覗いた口元を悪戯っぽく歪めたりサに対し、私は両頬を膨らませて精一杯の抗議をしてみせ

る。

「で、でも、だからといって勝手に人の独り言に割り込んでくるのはどうかと思うの」

「それは悪かったね。しかしボクが言ったことは間違っ
てなかっただろう？」

「……」

私は答える代わりに、恨めしげな視線をリサに向ける。

リサは私の沈黙を肯定の印と捉えたのか満足げに頷くと、それまで足元に置いていた黒いアタッシューケースを右手に持ち直しながら愉快そうに口の端を吊り上げる。

「さて、じゃあそろそろ行こうか。この世に未練を残した可哀な霊を成仏させに、ね」

それを聞いて、私は毎度のことながらよく言うよ——と思う。もし彼女が言葉通りの殊勝な心を持っているとするなら、とてもじゃないがそんな風に笑ったりしないだろう。加えてその笑いは、リサのトレードマークである黒のフード付きコートと相俟^{あいま}って、どことなく魂を奪うことが楽しみでたまらない邪悪な死神を彷彿とさせた。

（もつとも彼女の死神としてのイメージを助長させる要因はそれだけではないのだけど……）

そんなことを考えながら、私は白いウールコートを羽

織った体をぶるりと震わせたのだった。

*

時は一週間前^{さかのま}に遡る。

リサと並んで自宅のリビングにあるソファに座り、ブラウン管テレビの画面をじっと見つめていると、間もなくノイズ混じりながら一つの光景が映し出された。書斎らしき部屋の中央に置かれたアームチェアに、グレーのスーツを着こなした人物が優雅に足を組んで座っている。七三に分けた白髪交じりの髪。病的なまでに白い肌。スラリとした体格。……だが、肝心の顔の部分だけがピンポイントでぼやけていてよく分からない。もつともそれはいつものことなので、初めてその姿を目の当たりにしたのならばともかく、見慣れた今となつてはさして気にもならない。

「やあ、リサ君にナナミ君。一ヶ月ぶりのご無沙汰だったけど元気にしてたかな？」

ボスはこちらに向かって親しげに語りかけてくる。しかしながら、ボスに私たちの姿が見えているわけではな

い。なぜならこれは、ビデオテープに念写された映像に過ぎないのだから。

「君たちの活躍は私の耳にもしつかり届いているよ。：まあ正確には活躍と苦情が半々つてところかな。聞けばこの間も悪霊相手に大立ち回りを演じたあげく、ビルフロアの壁の大半を爆薬で吹っ飛ばしてだいぶ風通しよくしたんだって？ 相変わらず無茶するよね」

「そ、それは、あそこがあのクラスの悪霊相手にするにはちよつと狭すぎただけで——」

そんなボスの言葉を聞いてリサが思わず言いかけたが、もちろんボスに聞こえているわけではない。しかしながらボスはまるでリサの反応が見えているかのようにひとしきり愉快そうに笑った後「じゃあ、そろそろ本題に入ろうか」と改まったように言った。

「今回君たちにやってもらいたいのは、連続猟奇失踪事件と関係があると思われる廃ビルの現地調査だ」

「連続猟奇失踪事件……？」と、耳慣れない単語に私が眉をひそめると、ボスはまたしてもこちらの反応を見越したように頷いて

「もちろん私が失踪事件ではなく、あえて猟奇失踪事件と称したのはそれなりの理由がある。というのこれ

まで失踪した六人の被害者には三つの共通点があつてね。一つ目は被害者がいずれも十代後半から二十代前半の若い女性であること、二つ目は失踪する数日前に肝試しきもだめの一環で問題の廃ビルを訪れていること。そして三つ目は、自室に被害者のものと思われる大量の血液と拳太くらしい血まみれの肉片を残して忽然と姿を消していること——。警察の調べによると、どうやらそれは腰のあたりの肉の一部らしくてね。しかも切断面からは生活反応が見られたとのことだ。……これが一体何を意味しているのか、君たちには分かるかな？」

「……」

もちろん、分かっている。その証拠に、私の隣でリサがいかに痛そうに顔をしかめている。

「そうだ。被害者は生きてまま切り取られたんだよ」

ボスはここぞとばかりに「生きてまま」の部分を強調して言った。

続きは非実在探偵小説研究会21号本誌
でお楽しみください。

企画2 2020年度エアミス研ミステリランキング

エアミス研研究会が選んだ2020年度のミステリランキングです。2019年11月～2020年10月の間に発売された国内外ミステリ新刊書を対象としています。投票者が選んだ10作品を1位：10点、2位：9点…10位：1点として集計しました。

各作品レビュー：麻里邑圭人（4位、8位のみ佐倉丸春）

【総評】

エアミス研が十周年を迎える2020年度は優れた短編集が多い印象があったが、エアミスランキングもそれを裏付けるような結果となった。

1位の櫻田智也「蟬かえる」は昆虫好きのとぼけた青年・夙沢が探偵役を務める連作ミステリシリーズの二作目だが、探偵役がホワットダニットを解き明かすことで人間ドラマを際立たせるだけでなく、同時に探偵役の内面も丁寧に掘り下げることで前作以上の高い完成度の作品に仕上がった。

続く2位の白井智之「名探偵のはらわた」もまた連作ミステリだが、作者初の名探偵物であることに加え、作者が得意とするグロが一切出てこないということで一時はどうなることかと思っただが、結果的には作者の新境地に相応しい内容で安心した(?)白井ファンも少なくないだろう。

逆に長編で気を吐いたのは3位の結城真一郎「プロジェクト・インソムニア」で、エアミスランキング初登場の新鋭ながら夢の世界という設定を活かした異様な不可能犯罪と動機で読者の度肝を抜いてくれた。

その他の新鋭だと、8位の斜線堂有紀「楽園とは探偵の不在なり」は門前典之ばりのトリックとエモさが、9位の筒城灯士郎「世界樹の棺」は構成を活かした仕掛けと世界観と直結した動機が、10位の五十嵐律人「法廷遊戯」は新人離れした完成度が魅力の作品である。

1位 櫻田智也「蟬かえる」【121点】

デビュー作「サーチライトと誘蛾灯」に続き昆虫好きの青年・夙沢が探偵役を務めるホワットダニット物の連作。今回謎を解くことで浮き彫りになるのは事件関係者の心情だけに留まらない。探偵役のキャラも掘り下げたことで物語としての深みも一層増した傑作である。

2位 白井智之「名探偵のはらわた」【92点】

鬼畜系特殊設定パズラーの旗手による特殊設定連作ミステリにして初の名探偵物。探偵対怪人の変形ながら怪人のモチーフとして昭和の猟奇殺人犯を持ってくる点が作者らしい。ロジカルかつエンタメ性の高い展開は間違いなく広い読者層に受け入れられるだろう。

3位 結城真一郎「プロジェクト・インソムニア」【75点】

新潮ミステリー大賞受賞作家による特殊設定ミステリ長編。夢の中で死ぬと現実でも死ぬという設定を活かした不可能犯罪と犯人当て、そして狂人の論理であるにも拘わらずこの設定だからこそ自然と受け入れられてしまう動機は圧巻の一言に尽きる。

4位 阿津川辰海「透明人間は密室に潜む」【74点】

気鋭若手作家初の独立短編集。一編一編、徹底的に趣向を凝らし、アイデア量も圧巻。透明人間が完全犯罪を目論む倒叙ミステリや「キサラギ」や「12人の怒れる男」などを合体させた法廷ミステリなど四篇収録。バリエーション豊かな傑作短編集である。

5位 大山誠一郎「ワトソンカ」【63点】

主人公のそばにいる者の推理力を飛躍的に向上させる特殊能力・ワトソンカによって探偵役と化した事件関係者たちが繰り広げる推理合戦が楽しい連作ミステリ。作者らしい奇抜な発想は勿論、能力を活かした仕掛けやロジックまで用意されたユーモア本格の傑作だ。

6位 市川憂人「揺籠のアディポクル」

深木章子「欺瞞の殺意」 【61点】

奇しくも独特な男女の関係を扱った作品が並んだ。前者は切ないボーイミーツガール物にしてクローズド・サークル物の新機軸。後者は多重推理が掘り起こす人間ドラマに翻弄される作者の最高傑作と言っても過言ではない作品である。

8位 斜線堂有紀「楽園とは探偵の不在なり」【43点】

二人以上殺した者は“天使”によって即座に地獄に引き摺り込まれるようになった世界という唯一無二の設定を携えて、本格ミステリ界に殴り込んできた新鋭による話題作。これは孤島×館の本格ミステリであると同時に悩める探偵の物語でもある。

9位 筒城灯士郎「世界樹の棺」【42点】

「ピアンカ・オーバーステップ」で星海社FICTIONS新人賞を受賞した作者の二作目。ファンタジー的世界観で始まった物語はいつしかクロード・サークルで起きる連続殺人劇となるが、その連続殺人の真相と世界の秘密が直結している稀有な仕掛けが実に強烈だ。

10位 五十嵐律人「法廷遊戯」【35点】

第62回メフィスト賞受賞作。尖った作品の多いメフィスト賞には珍しい端正な法廷ミステリでありプロットやキャラ、文体がいずれも良い意味で新人離れしている。加えて本作は青春ミステリとしての側面もあり、そういう意味では一粒で二度美味しい作品である。

《10位以下の作品》

【28点】 城戸喜由「暗黒残酷監獄」

【27点】 辻真先「たかが殺人じゃないか 昭和24年の推理小説」

【22点】 林泰広「オレだけが名探偵を知っている」

【20点】 アンソニー・ホロヴィッツ「その裁きは死」

【16点】 下村敦史「同姓同名」

【15点】 青崎有吾「ノッキンオン・ロックドドア2」／陳浩基「網内人」

【14点】 周浩暉「死亡通知書 暗黒者」／古野まほろ「新任警視」

【12点】 片里鷗「異世界の名探偵2 帰らずの地下迷宮」／米澤穂信「巴里マカロンの謎」

【11点】 柄刀一「ジョン・ディクソン・カーの最終定理」

【10点】 ディーリア・オーウェンズ「ザリガニの鳴くところ」／門前典之「エンデンジャード・トリック」

【9点】 朝永理人「幽霊たちの不在証明」／法月綸太郎「赤い部屋異聞」

【8点】 天祢涼「あの子の殺人計画」／浦賀和宏「デルタの悲劇」／小林泰三「ティンカー・ベル殺し」／坂上泉「インビジブル」／長岡弘樹「緋色の残響」／ポール・アルテ「殺人七不思議」／ラーラ・プレスコット「あの本は読まれているか」

【7点】 井上真偽「ムシカ 鎮虫譜」／金子ユミ「千手学園少年探偵團 図書室の怪人」／フィン・ベル「死んだレモン」／森谷祐二「約束の小説」

【6点】 折輝真透「それ以上でも、それ以下でもない」／玩具堂「探偵くんと鋭い山田さん 2 俺を挟んで両隣の双子姉妹が勝手に推理してくる」

【5点】 綾辻行人「Another 2001」／有栖川有栖「濱地健三郎の幽たる事件簿」／井上雅彦「珈琲城のキネマと事件」／エリー・アレグザンダー「ビール職人のレシピと推理」／エルザ・マルポ「念入りに殺された男」／河合莞爾「カンブリア 邪眼の章 警視庁「背理犯罪」捜査係」／三田千恵「天才少女Aと告白するノベルゲーム」／ドメニック・スタンズベリー「白い悪魔」／萩原麻里「呪殺島の殺人」／はやみねかおる「令夢の世界はスリッパする 赤い夢へようこそ -前奏曲-」／東川篤哉「君に読ませたいミステリがあるんだ」／ブラッドリー・ハーパー「探偵コナン・ドイル」／真下みこと「#柚莉愛とかくれんぼ」／汀こるもの「探偵は御簾の中 検非違使と奥様の平安事件簿」／宮ヶ瀬水「推理小説のようにはいかない ミュージック・クルーズの殺人」／モーリーン・ジョンソン「寄宿学校の天才探偵」／吉田恭教「凶血 公安調査官 霧坂美紅」／ローレンス・オズボーン「ただの眠りを」

【4点】 稲羽白菟「仮名手本殺人事件」／岡田秀文「首イラズ 華族捜査局長・周防院円香」／紺野天龍「錬金術師の密室」／竹町「スパイ教室02 《愛娘》のグレーテ」／円居挽「キングレオの回想」

【3点】 竹本健治「これはミステリではない」／M・W・クレイヴン「ストーンサークルの殺人」

【2点】 宇佐美まこと「黒鳥の湖」／桐山徹也「ループ・ループ・ループ」／平石貴樹「立待岬の鷓が見ていた」／三津田信三「逢魔宿り」／森川智喜「死者と言葉を交わすなかれ」

【1点】 秋竹サラダ「祭火小夜の再会」／池田明季哉「オーバーライト——ブリストルのゴースト」／玩具堂「探偵くんと鋭い山田さん 俺を挟んで

両隣の双子姉妹が勝手に推理してくる」／榎木理宇「虜囚の犬」／小島正樹「愚者の決断 浜中刑事の杞憂」／千田理緒「五色の殺人者」／辻堂ゆめ「卒業タイムリミット」

2020年度漫画・ゲーム・映像ミステリランキング

漫画、ゲーム、映像（映画、ドラマなど）を対象とした、ランキングです。対象期間はミステリランキングと同様、集計方法は投票者が選んだ5作品を1位：5点、2位：4点…5位：1点として集計しました。

各作品レビュー：麻里邑圭人（3位のみ佐倉丸春）

【総評】

2020年度の総合ランキングは「屍人荘の殺人」や「アリバイ崩し承ります」などの原作を映像化した話題作、「MIU404」といったオリジナルのミステリドラマが多くひしめく中、ミステリ漫画「Q.E.D.」の加藤元浩の新たな傑作が首位を射止める形となった。

1位となった「トロッコ問題」（「Q.E.D.if」17巻収録）は遺産相続問題と奇妙な葉書の関係、容疑者全員に犯行が不可能な遺髪焼失事件の謎に迫る話で読者の倫理観を試すようなその内容はどこか石持浅海作品を彷彿とさせる。続く2位もまたミステリ漫画の田村由美「ミステリと言う勿れ」7巻で、「トロッコ問題」を石持浅海とするなら、こちらは西澤保彦（黒い方）で最後に明かされる犯人の動機に何とも言えない気持ちになること請け合いである。そして3位のライアン・ジョンソン「ナイブズ・アウト／名探偵と刃の館の秘密」はアガサ・クリスティの映像化作品と言っても遜色のない出来映えの傑作ミステリ映画で、こういった作品がクリスティ生誕130周年の節目に出たことが何とも喜ばしい。

なお1位の加藤元浩は「Q.E.D.if」と並ぶ、もう一つのミステリ漫画シリーズ「C.M.B.森羅博物館の事件目録」を今年に完結、最後を飾る「C.M.B.殺人事件」（「C.M.B.森羅博物館の事件目録」44巻収録）も見逃せない傑作である。

1位 加藤元浩「トロッコ問題」（「Q.E.D.if」17巻）（漫画）
【17点】

よくある遺産相続を巡る事件とっていると見事にしてやられることだろう。問題そのものを誤認させる技巧もさることながら全ての謎が明らかになった時、タイトルの意味と相俟って静かな感動が呼び起こされる傑作である。

2位 田村由美「ミステリと言う勿れ」7巻（漫画）【14点】

今回は一巻丸々使った雪の山荘物——しかしながらこの作品らしい定番からの絶妙なずらしと探偵役の観察力が活かされた謎解きの密度が実に秀逸。それでいて今回も西澤保彦さながらの人間のどす黒さは健在で唯一無二の雪の山荘に仕上がっている。

3位 ライアン・ジョンソン「ナイブズ・アウト／名探偵と刃の館の秘密」（映画）【13点】

現代を舞台にした“アガサ・クリスティのような映画”を見事に体現、キャスティングも豪華なミステリ映画。自殺とも他殺とも取れる大富豪作家の死の謎と嘘つきだらけの一族相手に007のような名探偵が立ち向かう。

《4位以下の作品》

【11点】 野木亜紀子「MIU404」（ドラマ）

【8点】 蒔田光治「屍人荘の殺人」（映画）

【7点】 いずみ吉紘・神田優「アリバイ崩し承ります」（ドラマ）

【5点】 鬼頭莫宏・カエデミノル「かつて冷たい解を示した命題の別の事象での解の点」（「ヨリシロトランク」1巻）（漫画）／根本ノンジ「悪魔の手毬唄～金田一耕助、ふたたび～」（ドラマ）／舞城王太郎「ID:INVADED イド：インヴェイデッド」（アニメ）

【4点】 黒沢久子・木田紀生「ハムラアキラ～世界で最も不運な探偵～」第3話「私の調査に手抜きは無い」（ドラマ）／古沢良太「コンフィデンスマンJP プリンセス編」（映画）／Laplacian「白昼夢の青写真」（ゲーム）

【3点】 明仁絵里子「シリーズ・横溝正史短編集／金田一耕助 踊る！ 犬神家の一族」（ドラマ）／岩井俊二「ラストレター」（映画）／衛藤凜「私たちはどうかしている」（ドラマ）／加藤元浩「時計塔」（「Q.E.D.iff」16巻）（漫画）／古家和尚「行列の女神～らーめん才遊記～」 5杯目（ドラマ）／元麻

布ファクトリー「リモートで殺される」(ドラマ) / るーすぽーい・古屋庵「無能なナナ」6巻(漫画) / レジス・ロワンサル「9人の翻訳家 囚われたベストセラー」(映画)

【2点】 京極夏彦・志水アキ「青い紙 赤い紙」「秘する者、暴く者」(「中禅寺先生物怪講義録 先生が謎を解いてしまうから。」1巻)(漫画) / クリスティアン・アルヴァルト「カット／オフ」(映画) / 小林弘利「探偵・由利麟太郎」第2話「憑かれた女」(ドラマ) / ソウマトウ「シャドーハウス」6巻(漫画)

【1点】 アベラヒデノブ「嗚呼！素晴らしきチビ色の人生」(ドラマ) / 加藤元浩「C.M.B.殺人事件」(「C.M.B.森羅博物館の事件目録」44巻)(漫画) / 加藤元浩「その世界」(「Q.E.D.iff」15巻)(漫画) / 城平京・片瀬茶柴「よく考えると怖くないでもない話」(「虚構推理」13巻)(漫画) / 土方宏史「さよならテレビ」(映画) / 古沢良太「GREAT PRETENDER」CASE1(アニメ)

2020年度エロミス研ランキング

対象期間、集計方法は漫画・ゲーム・映像ランキングと同様です。“エロミス”の評価基準としては『どれだけ自分がそのシチュエーションに興奮したか』です。

各作品レビュー：麻里邑圭人

【総評】

エアミス研十周年ということで久々に開催したエロミスランキングだが、蓋を開けてみれば新人のデビュー作が1位に輝くという意外な結果となった。1位となった森谷祐二「約束の小説」は雪に閉ざされた館で起こる連続殺人というコテコテの内容に早坂吝ばりのエロジック(エロ+ロジック)と、島田荘司の提唱する二十一世紀型本格を融合させた意欲作である。また2位の二作品——市川憂人「揺籠のアディポクル」もまたクロズド・サークル物でエロジックを扱っている点は「約束の小説」と同じながら、こちらはあくまで切ないボーイミーツガールを際立たせる手段として使っているのが印象的。

一方、辻真先「たかが殺人じゃないか 昭和24年の推理小説」は主人公のあ

るうらやまけしからんなシチュエーションもさることながら辻作品ではお馴染みのそこはかかない寝取られ要素(?)をノスタルジックに演出した青春本格ミステリの逸品である。

1位 森谷祐二「約束の小説」【15点】

第12回ばらのまち福山ミステリー文学新人賞受賞作。謎に包まれた少女の独白とクロズド・サークル状況下の連続殺人。その二つの物語が斎藤栄を思わせるとんでもない気付きからのエロジックによって繋がり二十一世紀型本格へと昇華する手腕は一読の価値あり。

2位 市川憂人「揺籠のアディポクル」

辻真先「たかが殺人じゃないか 昭和24年の推理小説」 【11点】

前者は異色のクロズド・サークル物にして泣けるエロゲならぬ泣けるエロミス。後者はタイトルの意味が沁みる作者にしか書けない青春ミステリーにして作者らしい寝取られ要素が堪らない作品である。

《3位以下の作品》

【6点】 竹本健治「これはミステリではない」

【5点】 我孫子武丸「修羅の家」／城戸喜由「暗黒残酷監獄」／西澤保彦「夢魔の牢獄」／ポール・アルテ「殺人七不思議」／汀こるもの「探偵は御簾の中 検非違使と奥様の平安事件簿」

【4点】 深木章子「欺瞞の殺意」

【3点】 阿津川辰海「透明人間は密室に潜む」／白井智之「名探偵のはらわた」／吉田恭教「捜査一課ドラキュラ分室 大阪刑務所襲撃計画」／門前典之「エンデンジャード・トリック」

【1点】 筒城灯士郎「世界樹の棺」

投票へご協力ありがとうございました。



非実在探偵小説研究会～Airmys～21号

発行日 2021年5月16日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 1100円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2021 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています